

第 69 号

● 目次 ●

巻頭言 研究交流における「言語」	1
最近の研究会・シンポジウム等	
東北大学東北アジア研究センター 2015 年度研究成果報告会	2
日露ワークショップ 2016	2
はじめての「くずし字」—江戸時代の仙台を読む—	3
胡格吉夫（フグジフ）先生「モンゴルのことわざ研究に関する諸問題」	3
コラム 熊本地震が発生した	4
著書紹介	4～5
新任紹介／客員紹介	6～7
活動風景 気候変動と生業：シベリアとアフリカの比較	8
編集後記	8

巻頭言

研究交流における「言語」

東北アジア研究センターセンター長

岡 洋樹

本ニュースレター 57 号（2013 年 6 月刊）の「巻頭言」で、モンゴル・中国で開催されたシンポジウムに関わって、会議の開催言語や調査言語の「現地化」の傾向について言及した。中国やモンゴル、ロシアで現地研究者と交流していると、必ず言語の問題に直面する。つまり何語で会議を運営すると最も効果的なのかという問題である。世界のリング・フランカ英語なら大丈夫かと思いきや、ぜんぜんそうではない。57 号でも言及した数年前の北京の研究集会では、会議の主催者の希望で英語で報告をしたが、会の終了後に若い研究者から英語だったのでわからなかったと言われてしまった。その前の年に北京で開かれた会議に参加した時はモンゴル語で報告した。こちらの方はモンゴル人研究者が多かったので、より分かってもらえたが、漢族や日本からの先生方の一部は理解できなかったろう。モンゴルでの会議は、参加者の大多数がモンゴル語話者なので、モンゴル語でやってきた。2014 年に実施した会議では、ロシアからの参加者がいたために、ロシア語も使われた。モンゴルにはロシア語話者が多いので、そのままでもなんとかなるし、通訳も見つかる。資金がないので、通訳といってもプロを雇うのではなく、研究者仲間を手伝ってもらうのである。中国内モンゴルの参加者も多かった。彼らは漢語とモンゴル

語を話すが、後者で話してもらえれば問題ない。では英語ならどうかというと、残念ながら現在のところ十分に理解できない参加者の方が多数派となるだろう。結局報告の全部を完全に理解できる参加者は限られるので、「わからない」発表が出てしまうのはやむをえないのである。

私自身はあまり欧米の学界とつきあいはないが、数年前にアメリカ・プリンストンの高等研究所で開かれたラウンドテーブルに参加したことがある。もちろん英語で話をするのであるが、ある英語国の研究者から、清朝のモンゴル統治体制を英語で何と呼べばよいのだろうと真面目に尋ねられた。こちらはモンゴル語・漢語の概念を日本語に落とすことに苦労しているので、そんなことは自分で考えろと言いたくなったが、彼らは世界で共有できる英語の概念を探しているわけである。日本はじめ近代アジアの学問は、欧米の理解を理論的枠組みとして輸入してきた歴史がある。その枠組みが作られる現場に立ち会ったような気になった。



最近の研究会・シンポジウム等

① 東北大学東北アジア研究センター 2015 年度 研究成果報告会 (3月9日)

東北大学東北アジア研究センター 2015 年度研究成果報告会が、2016 年 3 月 9 日に東北大学川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟 6 階大ホールで開催された。本会はセンターが公募した共同研究の成果を報告する共同研究発表と、センター所属の教員・研究員が自身の研究成果を報告する個人発表からなり、共同研究成果モニターである、元福山市立大学教授・福田正己先生、慶應義塾大学教授・三尾裕子先生、早稲田大学教授・柳澤明先生にもご参加いただいた。

共同研究発表は震災、環境、言語文化、歴史文化の各セッションからなり、計 15 件の口頭発表が行われた。同じセッション内であっても、例えば震災セッションでは「被災地における宗教間、宗教内関係の変動」や「電磁計測技術を応用した台湾南部の津波痕跡調査」と題した報告が行われるなど、内容は多岐にわたった。質疑応答を含め一件当たり 15 分とタイトなスケジュールに対し、議論が長引き、運営側としては冷や冷やする場面もあったが、それだけ議論が活発だった裏返しでもある。

個人発表はポスターセッション形式で 5 件が行われた。研究成果をまとめたポスターを掲示し、それを見ながら来場者

と議論を行うポスターセッションは、理系の学会ではごく当たり前に行われているが、文系ではほとんどない。

文系研究者もそのような形式で発表を行うのは、文理融合を理念の一つに掲げる当センターならではと言える。こちらも「西シベリアの河口域生態系における寄生虫の食物網への組込」や「歴史資料保全活動における成果の社会共有—宮城県川崎町佐藤仁右衛門家文書を事例に一—」など、内容は広範囲にわたった。

成功裏に終わった報告会だが、敢えて課題を挙げるなら、やや内輪の会の感が強かったのは否めない。テーマを絞った公開講演会とは違う、センターの日頃の活動成果をアピールする場として活用する工夫はあっても良かったかもしれない。

(後藤章夫)



ポスター形式による個人発表の風景

② 日露ワークショップ 2016 (2月15日)

2 月 15 日に「日露ワークショップ 2016」がノヴォシビルスク大学・人文学部（以下、人文学部に略称）、本学・ロシア交流推進室、大学院文学研究科、大学院国際文化研究科、東北アジア研究センターの共催により、川北合同研究棟の会議室で行われた。東北大学とノヴォシビルスク大学の日露ワークショップは何度か行われているが、今回は、両大学の若手研究者や大学院生を含む点で、初めての試みであった。今回のワークショップでは共通言語が英語とされた。全体の司会は、岡洋樹センター長が務めた。

清水翔太郎氏（大学院文学研究科）が挨拶をされた後、教員 3 人による講義が行われた。すなわち、ヴォイティシク・エレナ教授（人文学部）の「東アジアの伝統文化における、ワインを飲む古来の習慣の社会的役割」、岡洋樹教授の「皇帝のモンゴルの側面：モンゴル史における清朝の文脈」、ヴォルコフ・パーベル教授（人文学部）の「古代の住居に人々を住まわせる方法（実験的考古学と現代史学）」であった。

その後、若手研究者 6 人による研究が報告され



日露ワークショップ 2016 が行われている様子

た。アナスタシア・レチュカロヴァ氏（人文学部）の「西洋歴史学における日本紋章学の研究動向」、アレシア・キャムベル氏（大学院文学研究科）の「1893 年に英語で書かれた伊達政宗の伝記」、大谷亨氏（国際文化研究科）の「坤輿萬國全圖の「ビジュアルリティ」について：日中の地図作成における、小人と巨人の国の表象に関する比較分析」、トゥルシュキン・アントン氏（人文学部）の「中国とアフガニスタンの関係におけるパキスタンの役割」、ボリス・ドミトリー氏（人文学部）の「三王国に関する近代の誤解：虚構と現実」、パオ・フムチル氏（東北アジア研究センター）の「清朝後期における民族混住地域の蒙漢の社会関係」であった。若手報告者には国際会議での報告となり、有意義な研究会となった。

(塩谷昌史)

③ はじめての「くずし字」 —江戸時代の仙台を読む— (2月3日・10日・17日・24日・3月9日)

上廣歴史資料学部門は2012年の発足以来、年初に仙台市博物館と共催で古文書講座を開催してきた。この古文書講座は本年度で4回目になる。毎年多数の方が受講を希望され、抽選を余儀なくされているが、今回も約140名の方が応募され、やはり抽選となり、当選した50名の方にご参加いただいた。

今年の講座は2月3日・10日・17日・24日の4回にわたって仙台市博物館の講習室で開催された。講師は、前半2回を仙台市博物館の倉橋真紀氏が担当され、後半2回を部門助教の友田が担当した。用いたテキストは「奥州名所図会」(倉橋氏)と戊辰戦争期の錦絵(友田)である。絵があって親しみやすい上に、文章がわかりやすく、字のくずしも比較的オーソドックスということから、このような史料がテキストとして選ばれた。私たちの意図は的中し、アンケートでは「まさに「はじめて」にぴったりのテキストで楽しく受講できた」「親しみやすく入門としてはよかった」「絵もあり大変良かった」との声が寄せられた。

それだけでなく双方ともに興味深い内容の史料であり、「歴史的な部分も大変楽しく読めた」「仙台の名所であり親しみがあった」「錦絵の詞書の面白さを初めて知った」というア

ンケートの声からは、史料によって見えてくる庶民の生活ぶりや考え方にも関心をもっていただけたことがうかがえる。

また、今回は受講を希望されながらお断りせざるを得なかった方が多数に上ったため、落選者を対象にダイジェスト版の講座を、3月9日、仙台市博物館の講堂にて開催した。初めての試みであったが、こちらも多くの方にご参加いただき、ご満足いただけたようである。

部門発足以来、活動の柱としてきた古文書講座は、歴史を愛好する市民の皆様のおかげに徐々に定着していているようである。今後も仙台市博物館をはじめとする東北地方の博物館や各地の古文書サークルと連携して、皆様のご期待に応えられるような講座を運営していきたいと思っている。

(友田昌宏)



講座のようす

④ 東北大学東北アジア研究センター モンゴル・中央アジア研究分野公開レクチャー 胡格吉夫 (フグジフ) 先生 「モンゴルのことわざ研究に関する諸問題」 (4月7日)

平成28年3月から4月までの2か月間、中国中央民族大学教授胡格吉夫(フグジフ)先生が外国人研究員(客員教授)として本センターに滞在された。中央民族大学は、中国における少数民族の最高学府で、モンゴル族が学ぶ蒙古语言文学系があり、先生はここで教鞭をとっている。フグジフ先生の専門は、モンゴル民間文学、とくに諺や謎々の研究で、中国国内のモンゴル人居住地域やモンゴル国などで膨大なテキストを収集、刊行している。モンゴル国留学経験を有し、現地で学位をとっておられ、モンゴル全土の民間文学の事情や研究状況に通じた方である。そこで4月7日、本学でモンゴルの歴史や文学を専門にしている大学院生を対象として、先生にレクチャーをお願いした。この日のレクチャーは、「モンゴル諺語研究に関する諸問題」と題するもので、①モンゴル諺語の編纂・研究状況、②諺語の概念と範囲の問題、③モンゴル諺語の起源について、④モンゴル諺語の種類、⑤モンゴ



フグジフ先生の著書

ル諺語研究の意義の5つの論題について、モンゴル語で講義された。モンゴル語の諺は、モンゴル国や中国で多くの研究があり、このレクチャーではフグジフ先生ご自身の『蒙古諺語研究』(2014年)・『蒙古諺語文化研究』(2015年)など諺に関する浩瀚な研究成果を踏まえて、上記の問題について平易に概説してくださった。諺のようなモンゴルの民俗文化は、モンゴルの歴史記述にも大きな影響を与えている。歴史記述自体が、モンゴル遊牧民の民俗文学の基盤の上に成立しているといったほうがよいかもしれない。諺には、遊牧民としてのモンゴル人の日常の生活・文化が色濃く反映しており、今もまた日常的に用いられている。ただ、モンゴルの文化を深く知らなければ、諺の意味を正確に理解することは大変難しい。それゆえ、先生のこの日の講演は、我々歴史を研究するものにとっても、たいへん示唆に富むものであった。

(岡 洋樹)

コラム

熊本地震が発生した

熊本地震が発生した。震度7を観測した4月14日夜M6.5（暫定値）に続き、16日未明に再び震度7を観測するM7.3（暫定値）の大地震が発生した。震源が浅く、その後も頻発する余震もあり熊本地方や大分地方に甚大な被害が出た。全国地震動予測地図（ハザードマップ）では、熊本付近の危険性は示されていた。しかし、活断層周辺であれば他の地域も同様で、特に熊本だけが危険視されていたわけではない。さらに言うと、14日夜の地震後にそれ以上の規模の地震が連続発生することは誰にも分からなかったし、もちろんハザードマップにもそんなことは書いていない。また、一連の地震が大分地方で震度6弱を発生させるまで飛び火したことも誰にも分からなかった。当然ながら、同規模もしくはそれ以上の直下型地震は、別の都市でも発生するかもしれない。ただそれは明日なのか来年か、何十年後何百年後なのかは誰にも分からない。これが現代の地震学の限界であり、大地震は突然やってくるのである。そんな状況では自分が被災者になるかもしれないと日々脅えながら生活することは現実的ではないだろうし、平穏な日常が続けば災害に対する備えすら疎かになっていくのが普通かもしれない。ここに我々研究

者に課せられた課題があるように思う。

具体例を挙げる。津波に対する備えとして巨大な防潮堤を作るか？防潮堤を作らず海岸の景観を守るか？といった問題である。もし後者の選択をした場合、景観を得たからといって決してそこで満足してはいけない。5年前の東日本大震災を経験をした我々は、その地域で暮らす人々の未来、何世代後もの未来まで津波や大地震の恐怖を鮮明に伝えていかなければならないという重大な責任を負うことになるのである。なぜなら、何年後なのか何百年後なのか分からないが、防潮堤が無い（または低い）ことにより、街は津波に容赦なく襲われるからである。更にその時には長年続いた平穏の中で、地震や津波災害に対する心構えや備えが既に失われている可能性が高い。非常に危険である。その昔防潮堤より景観を選んだ我々は、自分達のことしか考えていなかった愚かな先祖だと思われるだろう。

巨大地震は何十年～何百年、断層によっては何千年～何万年の間隔で繰り返される。子々孫々に我々の鮮明な記憶をどうやって伝えていくべきか？未来の彼らを守るため、我々研究者には災害の仕組みや対応、それに関わる歴史資料や地質記録の重要性を常日頃から社会に啓蒙していくという任務が課せられているように思えてならない。（平野直人）



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究専書11号

世界とつなぐ 起点としての日本列島史

荒武賢一朗編
2016年2月 清文堂出版

国境を超えた広いエリアを対象とした研究は、歴史学においても活況を呈している。とりわけ、「一國史」に閉じこもってきた日本史の分野でも隣接地域との交流を明らかにしようという動きが高まってきた。そのなかで本書は、おおそ17世紀から19世紀の日本列島を起点として当時の経済・外交を中心に各章を構成している。現在隆盛をきわめるグローバル・ヒストリーとはやや異なり、日本から広がる世界を描き出したことに特徴があり、当時の朝鮮、琉球、さらにはカリブ海との接点についても新出の歴史資料を活用しながら分析を深めることができた。

各章の具体的な考察では、商人たちの実像や、国際交流をめぐる文化人や役人たちのありよう、そして刺激あう技術の活用などを詳しく論じている。（荒武賢一朗）



東北アジア研究専書12号

東北からみえる近世・近現代 —さまざまな視点から 豊かな歴史像へ—

荒武賢一朗編
2016年3月 岩田書院

日本列島の各地には、それぞれの地域が大切に守ってきた歴史資料が豊富にあり、これを未来へと継承することがわれわれ研究者の使命だといえよう。そのなかで、東北地方の地域資料を活用し、これまで知られることのなかった史実を解き明かしたのが本書の各論である。

「地域の歴史」は、一言で片付けられない多様な出来事、人間たちの営みによって構成されるが、本書では「江戸時代の領主と民間社会」、「物流と商工業」、「地域に生きる人物と思想」という3つの主題をもとに構成した。たとえば、江戸時代の交通で重要だった馬はどのように活用されたのか、仙台で誰もが知っている百貨店が誕生した経緯について、といった身近なテーマから東北地方の歴史イメージの刷新に迫っている。（荒武賢一朗）



東北アジア研究専書13号

「宗教」と「無宗教」の近代南島史

— 国民国家・学知・民衆 —

及川高著 2016年3月 森話社



日本人は「無宗教」だと言われる。本書は民俗学、人類学、宗教学、民衆史等の学問領域を横断しつつ、そのような「宗教／無宗教」の言説がいつ日本に広まり、いかに我々の行動を編成してきたかを解明しようとした試みである。フィールドは東アジアにおいて周辺化された地域の1つである南島（奄美・沖縄）を扱っている。南島の宗教文化は仏教・神道ではなく民俗信仰を主としていたため、近代史料は現地の人々をしばしば「無宗教」と表現している。この「無宗教」は今日とは異なり、「怠惰」「放埒」等の侮蔑的ニュアンスを含み、その圧力はキリスト教の集団的受容や民俗信仰の再編などの動態を生み出していった。しかしその動態もまた、「無宗教」のニュアンスが今日のそれへと漸近するとともに変化していくことになる。その歴史過程の追跡を通じて、我々にとっての「宗教」を明らかにすることが本書の主題である。

(及川 高)

東北アジア研究専書14号

僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実践

川口幸大・稲澤努編
2016年3月 行路社



華僑のふるさと「僑郷」は、これまで特殊な地域として描かれてきた。故郷を脱して海外で稼いだ金を出身地へ送る人々の姿が強調され、それによって僑郷と華僑とは強い結びつきをもつとされるか、強い結びつきがあるがゆえに送金されるとされた。そうした現象を描く際には、意識的・無意識的に華僑が暮らす国々は、僑郷よりも豊かであることが前提とされてきた。

本書は、これまでの諸研究において上記のように付与されてきた「僑郷」の特殊性の脱構築を目指したものである。第一部では、これまでも「僑郷」とされた華南地域の最新事例からこれまで所与の前提とされてきた「豊かな海外、貧しい僑郷」パラダイムの刷新を図った。第2部では、移住者たちにとっての故郷の表象と実像を様々な事例から分析し、第3部では、移民を海外に送り出しているながら「僑郷」とされてこなかった地域の事例を「新しい僑郷」と位置づけで紹介した。

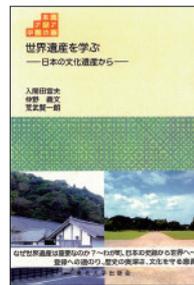
(稲澤 努)

東北アジア学術読本5

世界遺産を学ぶ
—日本の文化遺産から—

荒武賢一朗編

2015年12月刊 東北大学出版会



毎年春の終わりから夏にかけて、世界遺産登録のニュースが大きく取り上げられる。日本では1993年に文化遺産として法隆寺、姫路城が、自然遺産には白神山、屋久島が「世界遺産一覧表」に記載された。最近では2013年に富士山が登録されたというのは記憶に新しい。社会で注目を集めるトピックスであることは間違いないだろう。

しかし、私たちは世界遺産についてどれだけの知識を持っているだろうか。専門家はともかく、多くの人々は「知っているようで、知らない」というのが本音である。その登録までの過程や意義について、平泉や石見銀山、日光の実例を紹介し、「世界遺産とは何か」を考えるきっかけになるのが本書である。歴史・文化を継承すること、観光・商業による地域の活性化など、多角的にその成果を検証している。

(荒武賢一朗)

査読制学術雑誌

『東北アジア研究』20号

東北アジア研究センター
2016年2月



〔目次〕<論文>雑居地新潟に関する一考察—外国人の居留地外居住問題—をめぐる展開 (青柳正俊) / The Famine of 1932-1933 as a common tragedy of the nations of the USSR: national and regional aspects (Viktor Kondrashin) <研究ノート>社会的実践としての宗族復興—広東省東部潮汕地域村落の族譜編纂事業を事例として (横田浩一) <資料／研究動向>齒舞諸島と色丹島の地質資料と岩石試料の重要性 (平野直人、油谷拓、山本順司) / 宮城県で発見された尼港事件の記録—平間儀佐久「尼港惨劇史」— (平間義春、荒武賢一朗) / Hybrid Studies: An Interdisciplinary Approach to Premodern Japanese History (Michelle M. Damian) / 英国立公文書館所蔵の中国新疆関係文書について—1930～40年代を中心に— (上野松弘) / 現代ロシアの自国史教科書の動向—20世紀史の描写を中心に— (立石洋子) (以下書評略)

新任紹介



●助教

鄒立龍

(Zou Lilong /
ゾウ リーロン)

私は中国で最も寒い都市の一つである長春で生まれました。2009年に吉林大学地球物理学科で学士（理学）を取得し、2012年に吉林大学大学院固体地球物理学研究科で修士（理学）を取得しました。吉林大学では佐藤研究室で客員教授として滞在した劉財（Liu Cai）教授と佐藤研究室の助教でした馮暉（Feng Xuan）教授の指導を受けました。

そして2016年に東北大学大学院環境科学研究科で博士号を取得し、2016年4月から佐藤研究室で助教として働いております。

私の専門分野は、地上設置型合成開口レーダ（GB-SAR）に関するシステム設計、信号処理、近距離レーダ、地中レーダ（GPR）、マルチスタティックレーダ等です。

私が最初に仙台に訪れたのは、2011年3月11日の東日本大震災後の2011年11月で、佐藤先生が主催する地中レーダ講習会に参加するためでした。当時、仙台は特に海岸近くの多くの地域は、地

震と津波による被害が深刻でした。

私は仙台にこれまで4年以上暮らしております。私はこの4年間、佐藤研究室の同僚たちと地震と津波による被災地復興のために沢山の捜査を手伝ってきました。

佐藤研究室は環境モニタリングや防災のために役立つ優れた技術を沢山持っております。私たちはこれらの先進技術を防災と二次被害を最小限に抑えるために利用してきました。

私の現在の主な研究分野は、ミリ単位の精度で地滑りモニタリングを行うための、先進的な技術の一つである地上合成開口レーダ（GB-SAR）です。私はGB-SARが環境モニタリングと減災に適用されるべきであり、GB-SARの研究分野がより発展すべきであると強く信じています。このGB-SARをこれから開発していきたいという強い憧れのようなものが私を突き動かし、佐藤研究室で働き、研究させます。私のキャリアはここから始まります。

客員紹介



●客員研究員

丁澤剛

(Ding Zegang /
ディン ゼガン)

私は中国・北京理工大学から参りました丁澤剛（ディン・ゼガン）です。私は2008年に北京理工大学で博士号を取得し、同大学の情報電子学院で働き、2012年から准教授を務めています。私は2016年4月から3ヶ月間の予定で佐藤研究室に客員研究員として赴任しました。佐藤研究室はGPR技術において世界であり、この研究室で技術を学びたいと思って参りました。私が興味を持っている研究分野は、合成開口レーダ（SAR）のシステムデザイン、シミュレーション、イメージング等です。私は過去5年間に10件以上のプロジェクトに関わり、多数の論文と特許を公開しています。また、IEEE地球科学・リモートセンシング学会（IGARSS）やIET国際レーダ学会などでの座長を務めるなど、国際的にも要職を

務めた経験があります。

4月から1ヶ月が経ちましたが、この間、地中レーダ（GPR）技術やパッシブレーダ技術だけでなく、東北大学の歴史など多くのことを学びました。この中でも最も印象深いことは、佐藤教授の仕事に対する姿勢や教育方法です。佐藤教授は疲れを知らず毎日仕事に励み、学生達に1つ1つ着実に指導しています。

多くのことを学び、吸収する必要がある私にとって、この3ヶ月は非常に短い滞在となりますが、将来的に私の本務である北京理工大学のレーダ研究室と東北大学との研究・教育の連携を構築するために、この滞在は有意義なものになると信じております。



●客員研究支援者

金丹
(ジン ダン)

この4月1日から大学共同利用機関法人人間文化研究機構の「北東アジア地域研究推進事業」の研究拠点の一つになる東北アジア研究センターに客員研究支援者として配属された金丹と申します。中国の瀋陽（昔の奉天）の町で育ち、重工業都市の通弊でもあった大気汚染を経験したことを契機に、環境問題やその対策などに関心を持つようになり、日本の大気汚染経験や汚染対策の成功例を学びたく、海を渡ってきました。

周知のように、中国は自然、経済、社会の条件の多種多様により地域間格差が大きく、それと同様に環境汚染問題にも地域格差が生じています。大学院での修学時は、中国の都市型大気汚染問題を中心にデータ構築、数量分析などを通じて論文をまとめました。

その後、グローバル化が進むと同時に一国の環境問題が自国内に止まらず、貿易を通じて環境負荷の国際的移転が行われ、世界的影響をもたらすことに注目し、日本・中国・韓国ないし東アジアにおける諸国の二酸化炭素排出量の変化と国際的依存関係について実証分析などを行い、その実態を究明することに努めてきました。

グローバル化する環境問題において、持続可能な社会構築や環境保全を実現するための調査研究による科学的知見が必要とされるため、今後引き続き北東アジア地域の経済活動における国際分業・協力関係と資源の持続的・共存的利用の可能性を把握するための調査研究を行っていく予定であります。



●客員研究支援者

藤井真湖

これまでの私の研究は、モンゴル英雄叙事詩、伝説、謎々、民話等の口承文芸／口頭伝承に関わるもので、とくに、馬頭琴伝説の構造に関わる論文と博士論文で取り扱ったモンゴル国西部に痕跡的に伝承されてきた英雄叙事詩「アルタイ・ハイラハ」の研究がそれ以後の研究の素地を形成したといえます。前者の馬頭琴伝説の構造分析においては、馬が女性の隠喩として存在していることを提示し、その後の英雄叙事詩において登場する馬の隠喩にも応用可能であることを諸論文で示そうとしてきました。

口頭伝承の特徴は動態性にあり、隠喩がうまく抽出されることはなかなかないのですが、その痕跡はたどることができるという主張をしてきました。後者の英雄叙事詩「アルタイ・ハイラハ」は「語ってはない」と言われてきたにも関わらず、なぜか語り継がれてきた不思議な伝承です。なぜ語ってはないのかは、明示的な内容からは理解できません。他の英雄叙事詩と代わり映えのしない内容

です。それゆえ、この英雄叙事詩を解明することは、他の英雄叙事詩の全般的な解明につながるが見込めました。実際、当該英雄叙事詩の考察をとおして、モンゴル英雄叙事詩における言語芸術のテクニクについての多くの知見を得ました。その成果は最終的に『伝承の喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公—』（2001年日本エディタースクール出版）にまとめられています。

その後、前者の馬の隠喩も絡めてモンゴル言語芸術のテクニクを示すために、馬頭琴伝説の他に、英雄叙事詩「シリン・ガルゾー」、西モンゴルの有名な英雄叙事詩群『ジャンガル』、書承の「ウバシ・ホントイジ伝」等を構造分析しました。その成果は『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』（2003年風響社）にまとめられています。

現在は、主にこれら英雄叙事詩を中心とした研究を土台に『元朝秘史』の研究をおこなっています。

活動
風景

気候変動と生業:シベリアとアフリカの比較

学際科学フロンティア研究所 / 東北アジア研究センター助教 藤岡悠一郎

2016年2月10日、夜のヤクーツクに到着した。気温はマイナス40度。ロシアに足を踏み入れるのはこれが初めてだ。同時に、マイナスがこんなに大きいのも初めての体験であった。今回の出張は、2015年9月から4年半にわたって実施される、文部科学省の補助事業「北極域研究推進プロジェクト」、通称アークス (ArCS) の研究活動の一環である。東北アジア研究センターでは、高倉浩樹教授が代表となり、副代表機関である北海道大学が分担するテーマ「北極の人間と社会: 持続的発展の可能性」に参画し、「環境変化の諸科学知見を地域住民に還元する教育教材制作の取組」というテーマを分担している。今後、シベリアの環境変化やそれともなう住民の生業・生活の変化を明らかにし、環境教育教材をロシア側研究者とともに作成する計画である。

筆者はこれまで、アフリカ乾燥地域の生業変容に関する研究に従事してきた。砂漠やサバンナの広がるナミビア国において、近年の気候変動が生業に及ぼす影響を調査してきた。私の調査地は、気温が毎日プラス40度くらいになる乾燥地域である。人々は、雨季にわずかに降る雨を利用して、トウジンビエという作物を育て、ウシやヤギを飼養する牧畜を営んでいる。昨年4月に東北アジア研究センターに赴任して以来、アフリカと東北アジア地域との生業に関する比較研究をしてみたいと常々思っていた。近年の温暖化にともない、シベリアでは永久凍土の融解が進み、他方、アフリカでは大雨洪水や干ばつがかつてとは異なるパターンで発生するようになっている。グローバルに進行する気候変動が、異なる環境でいかなる影響を及ぼし、人々が対処しているのか把握したい。もっとも、数万年の歴史を振り返れば、人類はアフリカとシベリアという、両極端の気候下でそれぞれ生業適応を遂げ、多様な資源利用のシステムや文化を発展させてきた。その点も、異なる地域を



ウシ小屋

を取り上げる上で興味深い点である。

今回の出張では、現地のカウンターパートである研究者にプロジェクトの説明をし、今後の研究方針を考え

ることが主な目的であった。プロジェクトの活動についての議論は滞りなく進み、その後、カウンターパート

の先生方が村落や市場を案内してくださった。ヤクーツク近郊の村では、まず犬小屋が外にあるのに驚いた。犬は我々が近づいたら小屋から外に出てきて、雪と氷まみれになりながら元気に吠えていた。次に案内してくれたのはウシ小屋である。牛糞で壁を塗り固め、頑丈な扉によって中は保温されていた。扉をあけるとウシの匂いと暖かい湿気でメガネが曇った。外の光は全く入らないが、中には電気がついていて、小屋の中は板張りの床になっていて、その上に20頭くらいのウシが佇んでいた。しかし、水は外に飲みに行く必要があり、一日一回、水場まで連れて行くという。これはアフリカと同じだ。しかし、ロシアでは牛の乳が凍ってしまわないように、牛用の腹巻をつけるという。ウシの逞しさとこの地域に暮らす人々の知恵に感心した。

その後、現地の市場を案内してくれた。ここはいわば露店市場で、外で一日中商売をしている。入り口には、売り物の大きな魚が雪のなかに何本も突き刺してあった。天然の冷凍庫なので、肉も魚も、冷凍状態で無造作に置かれている。段ボール箱に、凍った白いウサギがたくさん入っているのはシュールな光景だった。ナミビアでは空気が乾燥しているので魚も肉も、全てカラカラに干して露店で販売している。それぞれ、環境に適した方法で商売をしているのである。

短期間のシベリア滞在中、気候環境が全く異なる地域での生業をアフリカと比較していると、相違点よりもどちらかという点と類似点のほうが目についた。極端な環境に適応していく人々の知恵は、地域の自然環境に巧みに合わせていく際に似たような仕組みが生み出されてきたことを感じた。しかし、これから調査を深めていくと、想像もしていなかったような独自の仕組みが見えてくることであろう。グローバルに進行する近年の環境変動への対応を考えていく際、遠く離れた2地域の比較は、何か新しいヒントをもたらしてくれるかもしれない。そんな期待や可能性をたくさん感じさせてくれたロシア出張であった。



ヤクーツクの露天市場

編集
後記

新年度早々熊本地震という大災害が発生しました。報道されている被害の中に観光業への打撃があります。今日、日本はインバウンドを国家戦略として推進しています。人口減少対策の起爆剤ともいわれるこの戦略ですが、観光業は災害の影響をまともに受ける産業です。日本が災害列島である以上、インバウンドを国家的に進めるのであれば、地域観光業への災害に備えたリスクマネジメント、災害後の救済も国家的に行われるべきだと思います。(高橋陽一)

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第 69 号 2016年6月24日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。